

## 「罫炉裏」というトポス―高橋秀雄論

沢崎友美

はじめに

二〇一二年度読書感想文全国コンクールの課題図書の内、中学校の部で創作ジャンルから選ばれたのは、次の二作品であった。一冊は、パトリック・ネスの『怪物はささやく』

(シヴォーン・ダウド原案、池田真紀子訳、あすなる書房、二〇一一年)、もう一冊は、高橋秀雄の『地をはう風のように』(福音館書店、二〇一一年)である。

場所も時代もジャンルも異なる両者は、本来比較すべき筋合いのものではないが、右の事情により併せて読んだという人の中には、両者が実に対照的な作品だと感じた向きもあったのではないか。

前者は現代のイギリスが舞台のファンタジー作品で、重い病気の母親と二人で暮らすコナーの物語だ。彼は感情をあまり表に出さず、自分をいじめる少年にも逆らわない。そのくせある理由から、彼を心配してくれる幼馴染の少女をひどく憎んでいる。そんなコナーの元に、ある夜イチイの木の子が訪れ、彼の「真実」を呼び覚まそうと、奇妙

な物語を語り出す。木が歩き出す場面から始まるせいでもあろうか、全編を通じて、足元が定まらないような不安感がつきまとう作品であった。

一方、後者は高橋が『月夜のバス』(新日本出版社、一九九五年)でのデビュー以来(同人誌『季節風』誌上等での活動を含めればさらに以前から)書き続けてきた、一九六〇年代の栃木県・小林地域を舞台にしたリアリズム作品である。主人公のコウゾウは、やはり父親不在の家庭で、貧しくもたくましく生きていく。「いらだった気持ち」を「おさめようなどと考えたことさえない」(一一頁)彼は、時に「気違い」とさえ呼ばれるほどの喧嘩っ早さだが、そんな自分を素直に見てくれる転校生の文子は、彼の心を仄かに温める存在である。なお本作は、コウゾウが吹き荒れる風の中で大地を踏みしめ、薪割りをする場面から始まっていた。

一概には言えないものの、現在のYA層対象の作品では、『怪物』のような世界観を採用するものが多いであろう。